

哲學研究

第二百三號

第十八卷
第一號

形式社會學に對する一つの批評について

——價値の形式と價値の内容——

故 岩 崎 吳 郎

形式社會學に對しては種々なる立場から批評が加へられる。心的相互作用と云ふが如きものは、斷續常なき心的過程なるが故に、持續的なるべき社會の本質を明かにし得ずと云ふのもその一つである。かかる批評をなす代表的學者の一人として我が高田保馬博士が擧げられる。

註 高田博士、社會學原理、九九—一〇〇頁 社會學概論、社會關係の研究等參照

博士が心的相互作用説を排して結合説原理、概論にありては、望まれたる共存社會關係の研究にありては、不定限なる接觸の用意として結合なる概念が更に説明され

てゐる)を取られる理由の一つは相互作用は刻々に變化し、斷續常なきもの、然れども成員間の相互作用の行はれざる間に於いても吾人は尙ほ社會の消滅し終りたるを信する能はず、相互作用なきときにもなほ社會の存在を主張し得んが爲めには、結合を以つて社會の本質となさざるべからずといふにある。

いま博士の所説を一々詳細に吟味し、之を批評することは目的でない。ただ形式社會學に對するかかる批評を取り扱ふことより始めて、私の社會本質論に對する見解を開展するの準備としたいだけである。

端的に私見を述ぶるならば、社會の本質を過程の裡に求めやうが、或はかかる過程がそこより生み出さるる地盤としての状態の裡に求めやうが、それは結局程度の問題である。もとよりかくの如き論に對して博士は反對されるかも知れない。然し私は社會の本質とは存在の裡に求めらるべきものには非ずして、價値の裡に求めらるべきであるといひたいのである。

社會の本質とはあらゆる社會と稱せられる所のものに事實的に共通なるものを指して云ふのではなく、そはむしろあらゆる社會が何らかの形に於いてか、また何らかの程度に於いてか實現せんとする當の目的である。

かくの如き論は、これ經驗科學としての社會學と社會哲學との區別を知らざる所より起るものとの非難がなされ得るかも知れない。此の問題に私は後より觸れるであらう。

とにかく私は波多野精一博士がその「宗教哲學の本質及其の根本問題」に於いて、宗教の本質は事實的普遍者として考へらるべきものではなく、それは價値を現はす目的論的原理であると論せられたこと（同書五六頁）を以つて社會學が社會の本質を論ずる際にも學ぶべき態度なりとするものである。

望まれたる共存といふも或は不定限なる接觸の用意といふも、こは何れも存在の概念である。心的相互作用といふはもとより存在の概念である。（勿論ここに云ふ存在とは價値に對して存在といふ場合の存在である）等しく何れもみな存在の概念であるならば、望まれたる共存は持續的、相互作用は一時的といふも、要するに比較的長きか、比較的短かきかの違ひのみである。社會の持續性とか斷續性とかいふも、要するに社會の本質はかかる時間的な存在の裡に求めらるべきものではなく、社會をして社會たらしめる當のものは、かかる時間を超越したる永遠なる相の下に於いて見られなければならない。時の流れの裡にあるものに永遠性はのぞまれない。

無始無終といふもなほ時間的存在たるを免れないのである。しかしかく云へばとて私は社會の本質が時間空間を超越したる何らかの形而上學的存在的裡に求められなければならぬと云ふのではない。カントの批判主義的な立場を以つて正當な立場と見る限り、かかることは許さるべくもない。存在を基礎づけるものは價值である。時間空間の裡に構成せられたる、經驗的存在には非ざる價值についてこそ時間を超越したる永遠性といふことが云ひ得るのである。

私は高田博士が社會の本質を以つて結合そのものの裡に求めざるべからずとせられた態度に反對するのではない。ただ結合を以つて高田博士の如く解することに満足する能はず、これを以つて一つの價值なりとしたのである。今此の價值を假に結合價值 *Verbindungswert* と名付づけることにする。

私は社會學を以つて自然科學なりとは考へる能はず、リツカート等の所謂文化科學の一として考へたいのである。然らば周知の如く、かかる學の對象は如何にして構成されるかといへば、かの普遍妥當なる文化價值に理論的に關係せしめられることによつてである。私は學問の獨立性といふことは、かかる對象構成の原理となるべき價值の獨自性の裡にあるべきものと考へる。いささか對象的なる説明をな

さば社會學の對象となる文化生活は、その裡に於いて藝術的價值、學問的價值、道德的價值等の何れにもあらざる獨自の價值を理想とし、これを實現せる生活でなければならぬと考へるものである。人或はかかる價値の考へうべからざることを主張するかも知れない。然し私は所謂、歴史的、社會的實在が、藝術、道德、學問、宗教、經濟、法律などにことごとく分たれ終るものではないと信ずる。結合生活そのものは矢張り、これらのものと相並び、これらのものより區別され乍らその獨自の存在を持つものである。

此の點に於いて私は高田博士が、社會現象の本質と社會の本質とを分け様とせられた考方には賛意を表す。ただ博士が社會學を以つて普遍的文化的文化科學（もつとも社會關係の研究に於いては社會學はも早や文化科學とは呼ばれてをらない）なりと概論時代に於いては思惟され乍ら、しかも結合を以つて社會の本質なりとされ乍ら、更に一步を進めて、此の結合を以つて一つの價値なりとせられなかつたことを遺憾に思ふものである。私をして云はしめれば從來の社會學の大部分は徒らに社會の本質を事實的普遍者の中に求め、此れが價値なることを論せざりし點に於いて自然科學的であつたのである。かの動物社會學といふが如き語は文化なき文化と云

ふに等しい。ベートーベンのジンフォニーと鶯の囀りとを等しく音楽なりとなすことの非なるが如く、蜜蜂の巢と神聖羅馬帝國とを等しく國家なりと考へるは無意義である。

註 結合を以つて價值なりとなす考は昭和二年に提出せる卒業論文「社會學に於ける普遍的的方法について」に於いて既に論じたものであるが當時不幸にして此の考は賛成せられざる場合が多かつた。然し私は今なほかかる考を棄て難く思つてゐる。

社會學の對象はかかる價値に理論的に關係せしめらるることによつて構成せられる。かかる學を以つて社會學なりとなすは社會學の傳統を無視するものと云ふ人があるならば名前などはどうでもいい、社會學 Soziologie といふ代りに結合學 Verbindungslehre とするまい。

なほ敍上の論と關聯して考へられることは、結合對分離の關係である。結合を價値なりとせば社會學の對象はこれに關係せしめられることによつて構成されるのであるが、その場合次の如くなる。

結合的者(廣義)	}	結合的者……結合	}	社會學の對象
反結合的者……分離		反結合的者……分離		
非結合的者……無關心				

分離の根柢になほ結合を考へるといふ考は高田博士の「結合の上位」とかフイアカントの所謂「ガリレイ的發見」の裡に見とめられるが、私の様に考へて行つても、分離の根柢に尙ほ結合を考へ得られ、社會學は結合と共に分離をもとり扱ふべきことが、社會の本質を結合となしつゝ、なほ可能となる。これ結合對分離の關係は價值は價值對反價值の關係に於いて考へられ、しかしして反價值もなほ價值的(廣義)であり得るからである。

扱て以上述べ來れるが如く、私は價值を以つて、社會をして社會たらしめるものとなしたのであるが、かく社會の本質を價值となすことには一つの難點を伴ふ様である。かかる價值が若し社會の本質であるならば、かかる意味での社會の本質如何を論ずることは一經驗科學たる社會學の任務にはあらずして、そはむしろ社會哲學の任務であるであらう。さらば社會學が社會とは何ぞやと問ふことは無用なことであらうか。されど「社會とは何ぞや」を常に中心的な問題となし來つた社會學の傳統に相反することとなる。

此の難點は如何にして解決せらるべきか。此の問題を次に考へて見たい。價值の形式と價值の内容 *Wertform und Werthalt* との區別が此の問題を解決する可能性

を與へてくれる様である。價值の内容とは如何。一般に價值は形式的な無内容なものと解せられてゐるだけに價值の内容とは一見形容矛盾の如く見える。リッカートはカント認識論に於いて純内容的なものとせられたる所の所與 *das Gegebene* の中になほ形式と内容を區別して所與性の範疇 *Kategorie der Gegebenheit* なるものを立てた。若しかくの如き事が許されうるとするならば一般に純形式的なるものと考へられてゐる所の價值に於いても亦更に形式と内容を區別することも可能なわけである。然らばそもそも價值の内容とは何であるか、價值の形式とは何であるか。今例を經濟學にとつて考へて見やう。經濟學とは人生を經濟的價值實現の行程として理解せんとする所のものであり、かかる意味での經濟學の對象は經濟的文化價值に理論的に關係せしめられることによつて構成せられる。しかして此の經濟的價值の持つ内容は經濟學的概念構成の論理的アプリオリである。かかる意味に於けるアプリオリは歴史的制約のもとに立つものであり、従つて當然に可變的なものである。

たとへば左右田博士に従へば經濟學のアプリオリは貨幣である。經濟的價值に關はらしめらるる限りに於いて意義あるものが經濟的と呼ばれうるわけであるが、

此の事は云ひ換へるならば貨幣なる概念に關係せしめられて意義あるものが經濟的と呼ばれると云ふことになるのである。然し所謂資本主義的經濟組織の時代にをいては凡ての經濟的事象は貨幣を中心とするものであるかも知れないが、貨幣そのものが既に人間歴史生活の發展の或る段階に於いて生じ來つたものである以上、我々はまた貨幣なき時代を未來にも持ちうることは少くとも想像しうるわけである。かりに資本主義的な社會が崩壞して社會主義的な社會が生れたとすると、そこにはなほ貨幣がありうるであらうか。貨幣、地代、利子、賃銀、資本など今日の經濟學の多くの中心的概念は全くその意義を失ふて了ふであらう。しかしてかかる時代については貨幣をアプリオリとして構成せられたる經濟學的概念はもはやその妥當性を持ち得ない。新しき時代の經濟學の新しきアプリオリを要する。従つて左右田博士の如くんばかかる新しきアプリオリの下に構成せられたる事象はもはや經濟的とも呼ばれ得ざるものとなり、經濟學の名すら之を稱し得ざることとなる。貨幣なき時代は貨幣ある時代に續くばかりでなく、又これに先立つことも可能である。そこで此の場合にも前と同じ様なことが起つてくる。

經濟史に所謂原始的封鎖的家族經濟の時代とは左右田博士に従へば之も經濟的

とは稱すべからざる精々、前經濟的とも呼ばれるべきものに過ぎなくなる。かくて貨幣なき時代の經濟は、リツカートの所謂 *das sekundär Historische* なものとなる。いかにも從來の經濟學の多くが自然科學的態度をとつた結果として貨幣なき時代もある時代も一樣に此れを同一概念の下に包攝して論せんとしたる所には幾多の缺點があるであらうが、又左右田博士の様にして所謂原始的封鎖的家族經濟の時代に對して經濟の時代と名づけることを拒み、かかる時代の研究をもつて經濟學プロバの外におかんとすることは如何であらうか。

しかし此の場合、かかることは經濟學のアプリオリが變つたのであるとして、此の前のアプリオリと後のアプリオリとをより高次なるアプリオリによつて統一して、よつてもつてその間の連絡をつけることは出来ないであらうか。

私は此の可變的なアプリオリを經濟的價值の内容と呼び、かかる可變的なアプリオリに對してより高次なる、従つてアプリオリのアプリオリとも云はれるべきものを經濟價值の形式と呼ぶことにする。此のアプリオリのアプリオリは或る内容が經濟價值と呼ばれうる爲めに持つべき形式となる。リツカートは價值の開放的體系 *das offene System der Werte* といふことを云つてゐるが、此の開放性は價值の體系に

ついで考へられる許りでなく、特殊なる價值そのものについても云ひ得られるであらう。

經濟價值の形式は、歴史的な制約のもとに立つ可變的な經濟價值の内容をして經濟價值たらしむる當のものであるが故に、そは一定の内容を受け入れ、他の内容は之を拒むといふが如く封鎖的なものであつてはならない。將來の同價值の新しき内容をもよく入れうるが爲めには開放性をもたなければならぬ。そこで經濟の本質は經濟的文化價值であるが、此の價值の形式は經濟哲學が、その内容は經濟學がとり扱ふといふことになる。即ち經濟哲學は「經濟とは何ぞや」と問ふことにより、經濟的價值の形式如何の問ひに答へんとするものであり、經濟科學は「經濟とは何ぞや」と問ふことにより經濟的價值の内容如何の問ひに答へんとするものである。かくすれば經濟の本質はアプリアリなもの、價值的なものなる故、これが何であるかの問ひは一經驗科學としての經濟學にとつては無用なりとの一見尤もらしき説の、實は成り立たざる所以を明かになしうるのである。

私は經濟學を例にとつて考へたのであるが、此のことは道德の哲學、道德の科學を考へても同じである。道德とは何ぞやの問題、即ち道德の本質如何の問題に、道德の

哲學は道德的價値の形式を明かにすることにより答へんとし、道德の科學は道德的價値の内容を明かにすることにより答へんとするのである。同じことは他の價値領域についても云ひ得るわけである。

扱て理論的文化科學の暫定性 *Provisorität* といふことがよく云はれるが、それはこれらの學が可變的なアプリアリにもとづいて起るものであるからである。然し此の可變的なアプリアリは不變的なアプリアリのアプリアリ即ち價値の形式にもとづくものなる故、暫定的なるものが實は非暫定的なるものを基礎にもつこととなり、暫定的なることによつて失はれるが如く見ゆる客觀性を保證されてゐるのである。

か様にしてくれば相互に異なる經濟學のアプリアリによりて構成せられたる經濟的なものは互にあるアプリアリのもとにをいて經濟的と呼ばれたるものは他のアプリアリのもとにをいてはもはや經濟的とは云はれずと云ふ風に排他的な關係の下にたち乍ら實はその各々の根柢に存するアプリアリのアプリアリに統一せられて、なほ共に經濟的と呼ばれうる様になるのである。しかして此れと同様にしてアプリアリの變化による經濟學體系の變化も、一を經濟學といはば、他を經濟學と

は呼び得ざるが如くにして實は共にアプリオリのアプリオリによる統一により、一つに連続せしめられることになる。

もとよりアプリオリをかく可變的なるものとなすことは心理主義的な立場にあるものとして非難されるかも知れない。然し此のアプリオリは可變的と云ふけれども、それはアプリオリのアプリオリの上に立つて始めてしか云ひ得るのであつて、一つのアプリオリによつて構成せられたる體系内に於いてはもとよりそのアプリオリは變化を許すものではないのである。

經濟學的概念構成のアプリオリとしての貨幣はも早やアプリオリとしての意義を失ふ時が來るであらうが、然し此のアプリオリは、かかるアプリオリによつて構成せられたる世界例へば資本主義的經濟組織の時代内に於いては正にその妥當性を失ふものではないのである。

そこでもとへもどつて社會學の問題にかへる。社會の本質は私見によれば結合價值である。故に社會の本質如何を問ふは此の價值が如何なるものであるかを問ふこととなる。その場合社會哲學は此の價值の形式を、社會學は此の價值の内容を明かにせんとするのである。

社會の理想と云ふもまた時代時代によつて異なるであらう。然しかく云ふは價值の内容について云ふものであつて、かかる可變的なものの根柢に變らざるものがあるのであり、此の變らざるものは結合價值の形式である。

そこで一經驗科學としての社會學はかかる價值の形式に特殊な内容を與へんとするものであると云ふことも出来るであらう。價值そのものは非實在的なものであるが故に、それ自體としてはかかる價值が如何にして、現實の探求を事とする經驗科學の對象構成の原理となりうるかは理解せられない。非實在的な價值が實在的な生活を論究する學の構成原理たり得て兩者間の橋渡しが可能となるのはかかる非實在的な價值が歴史的な制約のもとにある可變的なあるものをその内容として含み得るからである。もとよりかく云へばとて可變的なアプリオリは歴史的な生活の發展に於いて現はれ來りし可存在と同視されるべきものではない。貨幣が經濟のアプリオリであると云つた所で、此の貨幣は現實の貨幣そのものをあらはす概念でないことは論ずるまでもないものである。

以上述べ來れるが如くして、私は結局、社會の本質は社會の理想たる結合價值に求めらるべきであり、經驗科學としての社會學は此の價值の内容を明かにするもので

あり、社會哲學は此の價値の形式を明かにせんとするものであるとした。

もとより經驗科學が學の概念構成のアブリオリとしてたてたるものが眞にアブリオリとしての任にたへるものであるや否やの吟味をなすの任務は之は社會哲學の、別してその一部分たる社會學認識論にゆづらなければならぬものであるが。

以上の所論に對しては種々なる反對があり得るであらうが、私はただ文化の本質は文化の理想たる價値の裡に求めらるべきであり、従つて社會の本質も亦存在ではなくして價値でなければならぬ、しかして文化科學(例へば經濟學)に於いてとり扱はるべき各文化(例へば經濟)の本質はかかる價値の内容であり、かかる各文化科學に對應する各文化哲學(例へば經濟哲學)に於いて取り扱はるべき各文化の本質はかかる價値の形式である、といふ右の二點が承認されるならばそれで満足である。社會の理想たる價値を結合價値となすことの當否、またかかる價値の形式及内容を如何に考ふべきかの問題はまた別に論じたいと思ふ。(昭和六年十一月十一日)

【附記】昭和七年十一月十三日岩崎君はとうとう亡くなられた。稀に見る篤學、眞面目なる學徒として吾々は君が大感せられる日

を大いに期待してゐたのに昭和六年の夏重き病にかかられて遂にまた立つことが出来なくなつたことは返すくも遺憾の極みである。本稿はなほ未定稿で之を發表するのは或は故人の意に添はないものがあるかも知れないが、此れは前後二回の大患の

間に於いて少しく肉體の苦痛の和らぎたる時になつた云はば故人の絶筆とも見られるものであり、そしてあの病の苦惱の中にあつて尙ほ學問の爲めに努力せられた故人の健氣な精神を追憶する縁ともなると信じて敢て本誌に掲載して頂いた次第である。新潟にて 赤松記】